

個と協働の学びが響き合う授業の創造 ～自己認識を促す学習サイクルを自立活動に取り入れて～

1 主題・副主題について

(1)「個の学び」とは

生徒が課題解決を行う中で、自己の特性を捉え、課題解決につながる方法に気付いたり、気付いたことを活かしたりして課題解決を図ることである。

本校特別支援学級の生徒は、回避したい場面や苦手な課題、うまくいかない場面に直面すると、すぐにあきらめて、活動が止まったり、特定の物や活動にこだわったりする等の行動が見られる。特別支援学校小学部・中学部学習指導要領自立活動編の目標に「個々の生徒が自立を目指し、障害による学習上又は生活上の困難を主体的に改善・克服するために必要な知識、技能、態度及び習慣を養い、もって心身の調和的発達の基盤を培う。」とされている。これらのことから、軽度知的障がいのある生徒にとって日常生活や学習場面等の諸活動において、障がいによって生じるつまずきや困難を軽減しようとしたり、障がいがあることを受容したり、つまずきや困難の解消のために努めたりすることは、生涯にわたって必要である。そのため、自己の障がいによる困難を改善・克服するために必要となる知識、技能、態度及び習慣を養うことは重要である。

そこで、本研究では、自立活動の時間における指導を中心に、生徒が課題解決を行う中で、自己の得手不得手や行動の特徴、課題解決につながる方法に気付いたり、気付いたことを活かしたりして課題解決を図ることを「個の学び」と捉える。「個の学び」を充実させるために、片岡（2017）が提唱する自己認識を促す四つの視点、①自分のポジティブな面について知る活動を取り入れ、自尊心の回復または高まりに努めること、②障害を理解するための学びとして、科学的な知識を取り入れること、③得られる支援について知ること、④具体的行動につなげることを重視した指導を中心に取り組みを進めていく。

(2)「協働の学び」とは

他者と課題解決を行う中で、他者と自分との課題解決の方法の違いに気付いたり、他者の視点や考え、立場に立ったりして、課題解決を進めることである。

昨今の社会の情勢等をふまえ、特別支援学級の生徒たちが将来の自立と社会参加に向けて、自分の意思を他者に伝えたり、必要な支援を依頼したりする力は、他者と協働して課題を解決していく場面においても求められているし、インクルーシブな社会で生きていく上ではとても重要である。

特別支援学級における協働の学びを行う利点について、別府（2022）は「他者の変化に目を向けることで、自分の現状を再認識するきっかけとなり、自己を見つめることにつながる。」と述べている。自立活動の指導は、個別指導の形態で行われることが多いが、上述より指導目標を達成する上で効果的である場合には、集団を構成して指導するなど、協働の学びの利点を生かした指導も有効であると考えられる。そこで、本研究では、他者と課題解決を行う中で、他者との解決の方法の違いに気付いたり、他者の視点や考え、他者の立場に立ったりして、課題解決を進めることを「協働の学び」と捉える。

(3)「個と協働の学びが響き合う授業」とは

「個の学び」と「協働の学び」による課題解決を行う中で、成功体験を味わったり、他者からの多様な評価（称賛、感謝、共感等）を受けたりして、自己の考えや言動の変化を自覚するなどの自己認識を深め、課題解決につながる最適な方法に気付くことができる自立活動の授業のことである。

小道・片岡（2020）によると、自己認識は「自分についてできること、できないことを知り、自分がやりたいこと、やりたくないことを思い浮かべ、そのために自らどのように行動していくかを考えると

いう作業が必要」とし、この一連の過程そのものであると述べている。また、自己認識の過程では、教師からの指摘や級友との比較など、他者の存在が大きく関わっており、褒められることで「できる自分」を実感したり、指摘によって「新たな自分」を発見できたりする。さらに、知的障がいのある生徒は、自ら積極的に将来について考え、具体的にイメージを抱くことや、過去を振り返ることにも苦手さがあることが多い。したがって、具体的な場面で実感させていくことや自己を振り返る機会を多く与えることが重要である。そこで、本研究では、上述の「個の学び」と「協働の学び」による課題解決を行う中で、自己の考えや言動の変化を自覚するなどの自己認識を深め、課題解決につながる最適な方法に気付くことができる自立活動の授業を「個と協働の学びが響き合う授業」と捉える。

この「個と協働の学びが響き合う」授業を創造することで、生徒にとって回避したい場面や苦手な課題等に出会った際でも、解決の手がかりを探りながら、やってみようという気持ちをもって取り組み続けることを期待する。

(4) 「自己認識を促す学習サイクル」とは

自己の得手不得手や行動の特徴、課題解決につながる方法を認識させるために「きづく」「やってみる」「つかむ」という段階を自立活動の一単位時間の学習過程に設定することである。

日常生活でうまく物事を進められるようにするためには、自己の得手不得手や行動の特徴、課題解決につながる方法を認識する一連の過程である自己認識を促すことが必要である。一単位時間の学習過程において、梶浦（2022）は「AAR(Anticipation<解決への見通し/展望>, Action<実践/実行>, Reflection(省察/振り返り))という三段階による固有の内容を伴ったものとして連続した学習サイクルをスパイラル的に繰り返す必要性を説いている。このため、一単位時間の学習過程に「きづく」「やってみる」「つかむ」という三段階を設定し、繰り返し行っていく。

まず、「きづく」段階では、自己の課題について、改善・克服の必要性を感じることができるよう、生徒が学ぶ必然性を感じる場面を設定したり、学びの状況に応じて中心課題（生徒の実態を自立活動の視点6区分27項目で分析した最重要課題）の解決に常にせまれるようにするために学習課題を調整したりする。ここでは、課題解決を行う中で明確になってきた自分の得手不得手や行動の特徴、課題解決につながる方法、自分の行動や学習内容などをデジタルポートフォリオや学習ログをもとに振り返らせたりする。

次に、「やってみる」段階では、課題解決を通して、生徒が試行錯誤しながら、自己の得手不得手や行動の特徴を認識したり、自分の課題解決につながる最適な方法を探ったりする場面を設定する。ここでは、自他の言動を比較したり、課題解決につながる方法で実行できているかを教師が観察してフィードバックしたりする。学習活動を振り返る際、生徒が行動のポイントをメモしたり、教師が行動の様子をタブレット端末で記録したりするようにする。

最後に、「つかむ」段階では、一連の過程を振り返り、自分の行動とできたこととの因果関係を認識したり、課題解決につながる最適な方法を認識したりする場面を設定する。ここでは、自立活動の時間における指導で取り組んできた学びの軌跡を確認させたり、成功体験を想起させたりするために、学習の軌跡を可視化できるデジタルポートフォリオを活用し、生徒の言動を価値付け、自己の課題解決につながる最適な方法と自己の変容に気付かせたりできるようにする。

《参考文献》

- 1) 文部科学省『特別支援学校学習指導要領解説 自立活動編』(2017)
- 2) 小島道生・片岡美華編著『発達障害・知的障害のある児童生徒の豊かな自己理解を育むキャリア教育』ジアース教育新社 (2014)
- 3) 片岡美華・小島道生編著『事例で学ぶ発達障害者のセルフアドボカシー』金子書房 (2017)
- 4) 別府良太『個々の課題を改善・克服し自己理解を深める自立活動』実践みんなの特別支援教育 (2022, 7, 14-17)
- 5) 全国特別支援学校知的障害教育校長会『知的障害特別支援学校の自立活動の指導』ジアース教育新社 (2018)
- 6) 古川勝也・一木薫『自立活動の理念と実践』ジアース教育新社 (2021)
- 7) 小林和雄編著・梶浦真著『振り返り指導』教育報道出版社 (2022)